

正月に餅をつかないむら 戸室山麓坂本地区

宇都宮伝統文化連絡協議会顧問 柏村 祐司



戸室山神社参道の石段



戸室山遠望

餅なし正月の話は、稲作以外の多様な作物の栽培の様子を今に伝えられる。現在、稲作ばかりが重視され、昔のように多様な作物の栽培が見直されてもよい。

暮れも押しつまり二十八日頃になると、かつてはあちこちから正月餅をつく音が聞こえてきたものである。本家の筋の家となると、近所に住む親せきが集まり一日中餅つきでにぎわう。餅つきは暮れの風物詩であり、楽しいひと時でもあった。

ところが宇都宮市内戸室山麓の大谷町坂本地区では、昔から正月餅はつかない、食べないとされてきた。誠に奇異な風習であるが、それに関し坂本地区には次のような話が伝えられている。

その昔、大晦日に弘法大師と弟子の二人がやつて来た。そして戸室山麓に一晩で百の穴を掘り仏像を祀る決心をした。東の空がうつすらと白み始めた頃、最後の穴を掘ろうとした時に、どこからか餅をつく音がした。この餅をつく音を聞いた弘法大師は、大晦日の内に穴を掘り仏像を祀る念願がかなわなかつたことを悔やみ、穴を掘ることをあきら

め戸室山を離れた。

この話をやがて知ったむら人たちは、弘法大師の願いを破つてしまつたことを申し訳なく思い、以来正月に餅をつくことをやめたという。

ここでは弘法大師に結び付けたが、弘法大師が登場するのはよくある話である。例えば弘法大師が独鉛や錫杖等で大地を突いたら清水が湧き出したという「弘法清水」の伝説はその代表的なものであり、栃木県内では日光市三依獨鉛沢の「獨鉛清水」が知られている。徳の高い弘法大師にあやかり話の価値を高めようとしたものである。

ところで正月に餅をつかない風習を、民俗学の世界では「餅なし正月」という。正月に餅をつき食べる風習は、極めて一般的であるが、その逆は極めて稀である。したがって、どうして正月に餅をつかないのか、その訳を民俗研究者ならずとも不思議に思い、その理由を尋ねたくなる。そこで餅なし正月の風習を伝える所では、地区だけが取り残され珍しい存在になってしまった。そこで生まれされたのが先の話というわけである。

さて餅なし正月を伝える所では、里芋を食べる独特の風習を伝える所がある。鹿沼市上石川では、正月元日に一家の主が蓑を着て火炉裏で茹でた里芋を食べたものである。日光市野口や足利市渋垂等にも同じ

ような風習が伝えられる。そしていずれも里芋を何故に食べるのかといつた話も伝わる。これらは稲作以前に里芋栽培が広まり、その里芋食文化が稲作普及後も残されてきたことに他ならない。